

戦後五〇年・日清戦争一〇〇年を検証する

近代日本の朝鮮認識の形成を明治期の  
オヒニオン・リーダーである新聞社説によつて  
通史的・体系的に見ることのできる  
画期的な新聞集成！

資	料	新	聞	見
料	新	聞	社	る
		社	説	朝
		説	に	鮮

征韓論〜日清戦争

全6巻 ● 別冊1 「解題・朝鮮関係社説目録」

編集 ● 北原スマ子・園部裕之・趙景達・長谷川直子・吉野誠



緑蔭書房

## 刊行の意義

この資料集は、明治初年から一八九六年二月までの期間に、日本の主要新聞に掲載された朝鮮に関する社説を集成したものである。時期を限定するにあたって、当初は、一九四五年の朝鮮解放まで、あるいはせめて一九一〇年の韓国併合までの時期を網羅したいと考えていた。しかし、予想をはるかにこえた膨大な作業は、多くの月日を費やすことになった。そこで、とりあえず日本におけるアジア認識の大きな転換点になったといえる日清戦争までで区切って、刊行に踏み切ることにした。それは、日清の角逐を契機として成立した甲午改革政権が終焉するとともに、日露戦争の序曲をなすという二重の意味で画期と考えるからである。

近代における日本人の朝鮮認識に関する研究は、これまでさまざま成果を挙げてきた。しかし、その対象時期は、江華島事件、壬午軍乱、甲申政変、韓国併合、三・一独立運動、関東大震災下の朝鮮人虐殺など、日本と朝鮮の間に大事件が生じた時期にいちじるしく偏っていた。そのため、大事件に対する反応はかなり解明されてきたが、大事件から次の大事件にいたる、いわば谷間の時期における朝鮮認識の変化の過程に対する追求は相対的に弱く、そのことが通史的な理解を困難にしてきた。

また、その分析対象としては、福沢諭吉、内村鑑三、吉野作造、柳宗悦、中野重治など、代表的な思想家個人の朝鮮認識が、主に取り上げられてきた。そして、その思想家に対する従来の評価が、その朝鮮認識にミスが入られることによって、大きく改められたことも少なくなかった。しかし、各時期における日本人の朝鮮認識の全体像が描かれていないために、その思想家の朝鮮認識が同時代の人々と比較してどのような位置づけになるのかを論証することは、困難であった。

さらに、明治期の諸新聞の朝鮮認識に関する比較検討は、自由民権運動との関連から、主に壬午軍乱・甲申政変期などについて、行われてきた。しかし、日清戦争期までを通じてトータルに比較検討することは困難である。

## 編集者一覧

北原スマ子〔東京都立大学大学院博士課程〕  
園部 裕之〔日本近代史研究者〕  
趙 景 達〔千葉大学文学部助教授〕  
長谷川直子〔津田塾大学国際関係研究所研究員〕  
吉野 誠〔東海大学文学部教授〕

## 全巻の構成

第1巻

序文●横浜毎日新聞〔五三八頁〕

第2巻

東京日日新聞〔四九八頁〕

第3巻

朝野新聞●大阪毎日新聞〔五八二頁〕

第4巻

郵便報知新聞●読売新聞〔四七〇頁〕

第5巻

時事新報●日本〔五一四頁〕

第6巻

大阪朝日新聞●東京朝日新聞●自由新聞●



朝鮮をめぐる日清露関係のマンガ(ピコ)

今回の資料集の主なねらいは、このような従来の研究の弱点を補って、日本人の朝鮮認識の全体像を通史的に解明するための有力な素材を提供することにある。

すなわち、新聞は、コンスタントに発行されるという特性をもっている。その社説の論調を系統的に追求することができる。さらに、日刊の新聞は、月刊の雑誌と比較した場合、状況の変化に応じた、より細かい変化を追及し得る利点を持っている。また、別冊の朝鮮関係社説目録を活用することによって、朝鮮関係社説の質的变化ばかりではなく、量的変化をたどることも可能となる。したがって、たとえば、時期によって朝鮮関係社説が皆無であることも明らかになるが、その空白の意味を考えることは、重要な課題である。

また、新聞の社説は、読者の意識を一定程度反映し、かつ読者の意識形成に少なからぬ影響力をもつ。したがって、多くの読者をもつ新聞の社説の論調が、その時期の一般的な朝鮮認識に等しいと無条件にみなすことは慎まなければならないが、少なくともそれが、一般的な朝鮮認識を解明するための重要な手掛かりであることは間違いない。

日本人の朝鮮認識の通史的・体系的解明は、現在に至る日本人の民族差別意識の形成過程を明らかにしたい、あるいは日本の近代思想を朝鮮認識の面から鋭く照射したいといった問題意識に込めるばかりではなく、朝鮮人の思想や日本政府の朝鮮政策を評価する際の基準を提供する。したがってこの資料集は、日本思想史研究だけではなく、朝鮮思想史研究、さらに政治・外交史研究の発展にも大きく寄与するだろう。

さらに、朝鮮認識の問題ばかりではなく、日本のジャーナリズムが注目するほどの事件が、日朝間にいつごろどのように起こっているかについて、この資料集から検索し得るといって、日朝関係史研究の発展にとっても資するところが大きい。

この資料集が、ひとりでも多くの方々に活用されることを願ってやまない。

東雲新聞・国民新聞・万朝報・二六新報「四八〇頁」  
別冊  
解題・朝鮮関係社説目録

## 本書の特色

▼本資料集は、征韓論（一八七五）から日清戦争（一八九六）までの期間の主要新聞の社説のうち、朝鮮を主題とする社説（一八二六件）を網羅・集めたものである。

▼収録にあたっては、朝鮮を主題とした社説に加え、朝鮮に論及した注目すべき社説も掲載した。更に利用者の便宜を考え、朝鮮認識の補強に役立つと思われる社説（二七二件）も題目と掲載年月日を付して収録した。

▼各新聞毎に社説目次・目録を付した。別冊『朝鮮関係社説目録』は全15紙の社説記事を掲載日毎に集成した。朝鮮関係社説の質的・量的な推移を知ることができる。記事のあとに新聞名・復刻版の掲載巻・頁数を付し利用者の便宜をはかった。

▼本集によって、日本人の朝鮮認識の通史的・体系的解明が初めて可能になった。



日清戦争後の日本人の意識 田口米作が日本人の意識変化を諷刺して描いたマンガ。

# 近代日本の朝鮮観の通史的な研究を期待する

山田昭次

近代日本の朝鮮観の研究が盛んになって来たのは日韓条約反対運動の頃からであった。その頃の研究者は新聞の復刻版もなかったから、新聞の社説を写真機で撮影して集めるという苦勞をした。今回、緑蔭書房から刊行される『資料 新聞社説に見る朝鮮』は明治初年から一八九六年二月までの主要新聞の朝鮮関係の社説類を網羅的に収録したので、こうした苦勞は省かれることになった。今後はこの資料集を精読することで、より綿密な分析に基づく通史的な研究が現われることを期待したい。しかし、日本人の朝鮮観は思想主体の日本社会における位置や近代日本の構想、思考方法などと絡んで形成されるのだから、一見朝鮮観と関係のないように見える部分との関係まで分析しなければ、朝鮮観を把握できるものではない。この資料集は朝鮮を主題としない社説も合わせて目録に掲載したのは、右の点からみても賢明だった。研究の前進のために多くの方々にご利用されることを期待する。

〔立教大学名誉教授〕



# 明治のジャーナリストの朝鮮認識を具体的に検証できる記録集

宇野俊一

いま明治の主要な新聞の社説を通じて、これを解明しようという企てが実現した。画期的な事業である。その蔑視への軌跡を知ることによって、蔑視から解放され、平等・対等の立場で朝鮮民族と対峙する道が、この日本で切り開かれることを心より期待する。

〔奈良女子大学名誉教授〕

# 朝野新聞

## 近代日本の朝鮮政策・認識の形成を映す新聞資料

海野福寿

新聞は時代を映す鏡である。また社会の木鐸といわれる社説はオピニオン・リーダーである。

このたび明治期の新聞社説が集大成されるとき、主要新聞の朝鮮に関する論説が網羅的に収録されるというから刊行が待ちどおしい。おそらく多くの社説が対朝鮮膨張政策を支える主張を展開したものと思われるが、どのような論理構成をとったのか。あるいは、つきつきに起こった日朝間の「事件」をどのように分析し、批判したのかを知らせてくれるだろう。そして、この時代に形成された朝鮮認識が、その後の日本人の朝鮮認識をしばったのかを教えてください。

後続する時代の分の続刊を期待したい。ついでに望蜀すれば、各紙の朝鮮ルポルタージュ資料集もほしい。ルポもまた朝鮮像形成に大きな役割をはたしたからである。

〔明治大学教授〕

# 時事新報

明治初年から日清戦争直後までの当時の主要新聞における朝鮮問題について関係した社説・論説を網羅したものである。かつて私が日清戦争前後の新聞記事や社説をマイクロフィルムから閲読したときの日々が懐しく思い出される。

こうして、明治前半期における新聞に現われる朝鮮認識について一挙に通観できることになったことは、研究者ばかりでなくこの時代に関心をもつ者たちにとっては望外の幸せといふべきであろう。とりわけ、近代日本の一つの結末である敗戦から五〇年、日清戦争から一〇〇年というこの年に、世の木鐸をもって任じた明治のジャーナリストが朝鮮について何を語り、何を主張しようとしたかを具体的に検証できる記録集が発刊された意義は大きい。

待望久しい本書の公刊を喜ぶとともに、長期にわたって苦勞された編者と書肆に心からの敬意を表するものである。

〔城西国際大学教授〕

## 日本の朝鮮蔑視への軌跡の解明に 画期的な事業

中塚 明

明治から現在におよぶ日本人の朝鮮観はどのようにして形成されたのか。その朝鮮観が下敷きになって日本人のアジア観にも大きな影響をもたらしたことを考えると、このテーマは、ただ歴史研究の興味にとどまらず、現代を生きるすべての日本人にとってきわめて緊切な問題である。

日本人の朝鮮蔑視観は古代から不変のいわば民族的な体質のようなものであるかのように意見がある。それは正しくないのではないか。管見の限りでも明治の初期には、なお日本の朝鮮侵略に対する目も覚めるような批判があった。それが国を挙げての朝鮮蔑視に転換していくのはどうしてか。

## 聞新民國

### 明治期日本の朝鮮理解と認識の 基底部分を知る基本資料

琴 秉 洞

明治期日本の新聞の役割は、現代のような多様な価値観の時代の新聞と比較にならぬ強く大きな影響力を持つ時代であった。

福地桜痴は『江湖新聞』発刊の辞で「当今の時勢を知るの便となり、座側の重宝何事かこれにしかん」と書いているが、新聞の意義と効能の真を言い得てまことに妙である。しかも、今の新聞のいわば報道中心主義と異なり、明治中期頃までの新聞は、そのほとんどが政党新聞化しており、政論の持つ重要性は決定的ともいえる力を発揮した。

殊に明治期新聞の朝鮮に関する報道記事と社・論説は、初期の対ロシア問題を意識しての中国、朝鮮との連帯論的色彩あいから、江華島事件以後、朝鮮と利害関係を持ち、深まるにつれ徐々に朝鮮略取を射程に置いた論調に変わっていくさまは、世論形成と誘導という意味でもまことに面目躍如という感がある。

それまでの主として事件中心に採りあげられてきた朝鮮問題を「点と線」とするならば、社・論説を中心にトータルに朝鮮論調の推移を提示してもらえたのは、いわば朝鮮認識を「面」にまで上げたもので、明治期日本人のいささか身勝手な国際感覚ともいえるある種のひずみも併せ理解されたいへん面白いものである。

明治期日本の朝鮮理解とその認識の基底部分を、その歪みも含めて世に出すことは現今の朝・日関係の在りようを考えても意義のあることである。関係諸氏の多年の勞を多とし、その発刊を喜ぶものである。

〔朝鮮大学校講師〕

萬朝報

7月	12 風説果して真乎(朝野) *
1 韓使安駟寿何故に帰韓せしや(横毎) 1-400	22 検疫(大毎) *
対韓策施行の順序(朝野) 3-240	26 朝鮮再度の防穀令(東朝) 6-176
支那公使と朝鮮公使(読売) 4-452	27 防穀令事件(報知) 4-372
2 対韓策施行の順序(朝野) 3-240	28 防穀令の再発(朝野) 3-246
対外思想の発達(東朝) 6-170	朝鮮政府の防穀令(時事) 5-361
大石公使の進退(三たび)(東朝) 6-171	29 朝鮮防穀問題(東日) 2-421
3 日韓の關係憂ふべし(読売) 4-453	朝鮮の防穀令(国民) 6-343
6 政府の三難(日本) 5-498	31 朝鮮の防穀令(横毎) 1-404
大石公使(国民) 6-342	防穀令問題定まる(朝野) 3-247
8 貧弱を虐待すべからず(朝野) 3-242	11月
9 対韓策施行の順序(朝野) 3-243	21 防穀令と大鳥公使(読売) 4-457
11 清韓公使欠乏を告げん(横毎) 1-401	12月
14 朝鮮公使の後任に就て(万朝) 6-414	2 対外策近事(朝鮮出米禁止事件)(東朝) 6-177
15 民声天意(朝野) 3-244	11 大鳥朝鮮公使(大毎) 3-460
18 大石公使の免官(横毎) 1-402	31 明治二十六年暮る(大毎) 3-461
朝鮮公使(読売) 4-454	
19 大石公使の辞職(東朝) 6-172	1894(明治27)年
誰か韓山に之くものぞ(東朝) 6-173	1月
20 大石正巳氏(万朝) 6-415	6 世局一変の機(大朝) *
大鳥圭介氏(万朝) 6-415	10 防穀令と解禁談判(読売) 4-458
公使の兼任に就て(万朝) 6-416	21 朝鮮出米解禁の予告(東朝) 6-178

\*印は社説記事名のみ掲載(従って本文は未収録)

東京日日新聞の略

左頁の内容見本参照

# 『国民新聞』 目次

1890 (明治23年)	2・23 朝鮮の警報	3
25 外交思想	3	
1891 (明治24年)	3・14 朝鮮を如何せん	4
16 断じて対韓政略を定むべし	4	
19 韓廷に遣はすべき公使	5	
19 外交思想の弱点	6	
20 假を弄して真となす勿れ(朝鮮公使)	6	
9・29 朝鮮公使	7	
10・25 (三び) 遺韓公使	7	
11・5 朝鮮移住	8	
1892 (明治25年)	9 対韓策 公使其人を得るを論ず	9
4・17 朝鮮の風雲	9	
6・26 朝鮮の始末	10	
8・28 清国駐在公使	10	
9・28 大石正巳氏	11	
11・15 朝鮮の造貨問題	11	
1893 (明治26年)	11 朝鮮政府すら然り	11
1894 (明治27年)	12 朝鮮の風雲	12

18 朝鮮に於ける日本と勢力の反比例	18
18 消長の機	18
18 當局者の責任	18
19 朝鮮政略(大石正巳)	19
20 朝鮮の政權	20
20 大院君	20
20 閔氏と露国	20
20 支那の排閔政略	20
20 袁世凱と閔氏	20
5 朝鮮の風雲	5
17 朝鮮の風雲(再び)	17
18 朝鮮の風雲(三たび)	18
19 最後の決答(朝鮮事)	19
20 朝鮮問題の結了	20
23 日本に對する	23
26 大石公使の歡迎	26
10 朝鮮又た朝鮮	10
10 朝鮮と大石公使	10
17 大石氏の演説	17
20 大石公使	20
7 朝鮮の防穀令	7
10 大石均と洪鐘宇	10
1894 (明治27年)	10
12 刺客事件と日韓清の	12
14 刺客事件と清国	14
29 刺客事件	29

第4巻47頁(復刻版の掲載巻・頁)

### 外交思想の弱點

外交の事また漸く問題とならんとし、朝鮮の事、東方問題を再燃せしめ、條約改正の事、朝鮮の衝突を來さんどす、吾人は此事急よ問題とならば、我が國民が輕弁せず、浮動せず、沈着に之を討究せんを切望す、之によりて擴張的精神を復興し、侵略的精神を鼓舞するか如きは、最も願ふべき也、

擴張的精神侵略的精神、進退、勇怯相異なるが如しと雖、詮し來ればその根は一にして、自信する所なく、自ら恃む所なき臆病者の所置のみ彼れ已に外人を畏る、此に於てか病犬の漫に人を吠ゆるが如く、其の聲を大にし、其の毛をよだて、叫ぶ、知らざるものは之を恐る、知るものは一笑して與みし易きを悦ばん、彼れ強者を見ては之を恐る、然れども弱者を見ては直ちに進んで理非を定めずして之を搏たんとす、吾人は孩童に於て、小兒に於て、上に弱くして、下に強き内辨慶あるを見る、吾人が外交問題によりて憂ふる所は、此の臆病者が朝鮮の弱國に對しては侵略征伐の志氣を鼓舞し、他の強國に對しては攘夷保守的精神を鼓舞せんとするにあり、吾人は堂々たる四千万人の國民が、弱者を凌ぎ強者を畏れ、見ぐるしき内辨慶たらさらんを望む、

横井小楠翁曾て、開國の國是を論じて曰く、開國を論ずるものも鎖國の見を以てするが故に不可なりと、爾來三十年、鎖國黨の系圖を引き來りたる

臆病者は、保守的の反動の氣焔に鞭うち、我國民を導きて臆病者、神經質の人たらしめんとし、條約改正を論ずるにも、往々にして擴張的思想を以て之を論ずるものあり、是れ豈に外人を畏れ、外人を買ひかぶり、四千万の國民を以て、海船もて渡り來れる小數の外人を恐るゝものにあらずや、若しソレ故の開國論者をして此の如き俗論を見せしめば將た何ぞか云はん、是れ決して正々堂々、卓厲風發、新光を東洋に放たんとする勇敢大膽なる新國民の決して唱ふべきことにあらず也、

（91・3・29）

### 假を弄して

眞とせず勿れ（朝鮮公使）

今や朝鮮駐在、日本公使の舉動は、何となく中外人の矚目注意する所となれり、此時に方りて日本公使たるもの、須らく先づその大體の主義を定めざるべからず、卒然として激し、忽然として坐し干渉荒忽歸宿する所なきは、我が大日本國を代表して東洋の盟主たるべき所以にあらず也、

日本公使の差むき處理すべきの件は、釜山開港、元山防線、釜山居留地借地料の三件なりと雖も、吾人は日を追つて日本公使外交の技術を試むべきの件出で來るを疑はざる也、且つ以上の事件と雖も、之を處理する公使の主義如何によりては、朝鮮に於ける日本の地位をして、或は九天の高きに上らしむべく、或は九地の下に沈ましむべき也、

從來政府が朝鮮に派遣したる公使は、多くは皆な

その器にあらず、或る者は揚柳依々の文弱なるのみ、或る者は尋章摘句の俗儒のみ、されば老西郷の如きも、夙に公使の人物甚だ輕きを憂ひ、自らその任に當り、朝鮮をして到底開港せしめずんば已まず、不幸にして殘害を蒙らば此に征韓の師を起すも可なりと爲せり、爾來十有餘年、還韓公使のその器にあらずや依然たり、或る時は區々として他邦使臣の後につきて、韓人の眼中日本の價値なからしめ、或る時は卒然忽然として大國の威勢を奮ひ、韓人をして文祿の發怒を思はしめ、歸する所、日本の政略は猫眼の如く、秋天の如く、一定の方針なく、決して信任すべからずと爲さしめ掲ぐたる多數の日本黨をすら失望せしむるに至れり、是れ固より本國政府の政策如何によるも雖も公使の人物また與つて力なくんばあらず、新公使たるもの須らく此に三思せざるべからざる也、

變に臨み事に應ずる擔運用は、一に公使の手中に存す、是れ吾人の脈を容るゝ所にあらず、然れどもその大體の方針に至ては、吾人此に一言せざるべからざるものあり、安政の初米國公使ハルリスが日本に來るや、その政府は之に訓令して曰く、如何なる場合に於ても、日本國民を強迫驅欺するも勿れと、此に於てかハルリスが幕府のたりに盡すや、公平、誠實、當時の官人をしてその高義を感ぜしめたり、此に於てか英國政府もまたその公使エルデン侯に訓令して曰く、日本國民は善く怨むの民なり、決して刃に觸るも勿れと、爾

日本人の朝鮮認識の  
形成を知る基幹資料！



「征韓議論図」 後年になって想像して描かれたもの。中央の左側が岩倉具視、右側が西郷隆盛、その右に指を突き出しているのが江藤新平。

資	料
新	聞
社	説
に	
見	る
朝	鮮

征韓論～日清戦争

内容●全6巻〔全15紙収録〕別冊〔朝鮮関係社説目録〕  
体裁●B5判・上製クロス装・ケース入り  
頁数●総約三、〇九〇頁

編集者一覧

- 北原スマ子〔東京都立大学大学院博士課程〕
- 園部 裕之〔日本近代史研究者〕
- 趙 景 達〔千葉大学文学部助教授〕
- 長谷川直子〔津田塾大学国際関係研究所研究員〕
- 吉野 誠〔東海大学文学部教授〕

本資料集をお推めしたい研究者

- 朝鮮近現代史・日本近現代史・日本思想史・日本政治史・
- 日本外交史・日朝関係史・朝鮮思想史・中国近現代史・
- 日中関係史・日本近代ジャーナリズム史

予約募集

平成七年八月下旬一括刊行  
揃定価一五四、五〇〇円 (分売不可)

ISBN4-89774-223-4 C3021 P154500E

緑蔭書房

東京都板橋区板橋1-13-1 ☎03(3579)5444

表示価格はすべて消費税込みです

特約店